

主要122都市防災力ランキング

週刊

ダイヤモンド

<http://dw.diamond.ne.jp/>

2011 5/14
定価690円

震災で格差が際立った
小売りの商品調達力

積水ハウス
住宅事業改革の成果

第99巻19号／毎週土曜日発行／
平成23年5月14日発行／
大正2年5月10日第3種郵便物認可

あなたの
街は安全か？

震災に強い 街



独自

行政に頼らない本当の防災力 近所同士の挨拶や声がけが肝

兵庫県加古川市にある「加古川グリーンシティ」は1986年に完成した7棟約600世帯からなる14階建てマンション。阪神・淡路大震災を機に、98年、防災活動に取り組む自主防災組織「加古川グリーンシティ防災会」を立ち上げた。メンバーは40～50代の現役世代が中心で、防災組織として日本最先端を走り続けている。

防災会のモットーは「楽しく防災しよう」。防災活動は仰々しく構えてしまうと長くは続かない。

加古川グリーンシティでは防災会による防災ラジオもイカ焼きの炊き出し訓練も、常に笑いが絶えない。

防災に重要な地域のコミュニティ力、ハードの整備、防災知識の習得、このすべてを日常生活の中に組み込み、防災を語らずとも防災になるような「生活防災」が加古川グリーンシティのスタイルだ。

その後は敷地内の公園で走り回って遊ぶ。すっかり泥だらけになつた姿を、祭りの手伝いをしていた母親に見つかり、「井戸で手と足を洗わないと家に入れないよ!」と一喝される。手押しポンプを押して井戸水で手足を洗いながら、喉も潤す。家まで走って帰る道すがら、すれ違った隣の棟の老夫婦に挨拶する。

「こんにちは! 買い物袋、重うだけど持とうか?」「こんにちは。軽いから大丈夫。ありがとう。今日も元気だね」

そんな子どもたちの一日の光景に、じつは「防災力」が詰まっている。

加

古川グリーンシティでは餅つき大会をはじめ、数々のイベントが開催され、住民が交流を深めている。その催しのたびに防災会のメンバーたちがイカ焼きを振る舞う。これは災害時の炊き出し訓練でもある。

炊き出し装置の購入を検討した際、約30人分の3升を炊飯するのに30分を要する災害用自動高速炊飯装置よりも、短時間でより大人数分の食を貰えることからイカ焼き機を選んだ。炊き出し訓練も飽きずに楽しめるというのも選択理由の一つだ。

子どもたちは催しのたびにマン

ションのイカ焼きを食べ、防災会のメンバーは「イカ焼きのおいちやん」として定着。各家庭には非常時用にイカ焼きの材料となる小麦粉をいつも余分に1袋買っておくよう、頼んでいる。

敷地内に設置した防災井戸は非常時には住民たちの飲み水、生活用水となる。非常時だけではなく日常的に開放しているので、いざというときに使える水がどこにあるかを子どもたちは知っている。

母親たちも井戸の周りに集まり、談話を楽しむ。「井戸端会議」のごとく、ご近所同士のコミュニティの場ともなっている。

防災活動で最も大事なものと掲げるのが「挨拶運動」と「小さな親切運動」だ。住民に会えば必ず挨拶。小さな親切を心がけ、親切を受ければお礼を欠かさない。この単純な習慣を浸透させることができ、防災活動の第一歩だ。

「地域のコミュニティを活性化させる挨拶と親切。これができなければ、どんな防災活動をしても続かない」と防災会の大西賞典会長は断言する。

2007年に開局した防災インターネットラジオ局では、防災会のメンバーらが毎回、被災から復興を図る酒蔵の酒を取り寄せて飲みながら楽しく防災を語る「防災



炊き出し装置の購入を検討した際、約30人分の3升を炊飯するのに30分を要する災害用自動高速炊飯装置よりも、短時間でより大人数分の食を貰えることからイカ焼き機を選んだ。炊き出し訓練も飽きずに楽しめるというのも選択理由の一つだ。

子どもたちは催しのたびにマン

これが最先端の防災力だ!

3-3 加古川グリーンシティ防災会の取り組み

ソフト防災

特技などを事前登録する「町内チャンピオンマップ」

看護師、子守、インターネット操作など250人が登録

「ひと声かけてください」登録制度

災害時にひと声かけてもらいたい高齢者など災害弱者が事前に登録

大阪名物イカ焼きで炊き出し

短時間に大人数の食を貰えるうえ、楽しい炊き出し訓練が催しを盛り上げる

楽しい防災ラジオ

防災インターネットラジオを開局し、地元FMラジオでも配信。酒を飲みながら防災を語る

挨拶運動＆小さな親切運動

挨拶、親切、お礼の習慣を浸透させ、災害時に協力できる関係をつくる

楽しい防災会議「1000円出しの会」

理事会や夜回りの後の飲み会でアイディアを発掘し、仲間を増やす

自主防災組織の地震発生対応マニュアル

震災時に本部の構築や運営をチェックシートに基づいて進める

安否確認プログラムを開発

災害時、各棟の画面で安否確認が取れたところから色を付け、状況をひと目で判別できるシステム。搬送先や避難先も簡単に登録できる

治療・搬送の優先順位を決めるトリアージ

災害時に傷病者をタグで色分けして緊急度・重症度別に分類するシステム。待機場所もシートで色分け

応急手当や救命法を訓練

応急手当の普及啓発と救命講習を開催。市民救命士の資格取得を促す

エレベータ緊急時応急手当訓練

非常にエレベータ内に閉じ込められた人を救出する訓練

震災をゲーム体験

広報誌やラジオでは震災時に自分の命を守る方法をゲーム感覚で考える災害紙上訓練を実施中。防災訓練時には地図を囲んで災害時対応をシミュレーションする災害図上訓練を行う

非常時用に携帯する「あんしんカード」

血液型、治療中の病気、かかりつけの病院、緊急連絡先などを登録。事故などに遭ったときに迅速な対応を助ける

震災時対応をまとめた携帯カード「命のライセンス」

直後3日間の過ごし方、災害伝言ダイヤル使用方法などを記した

帰宅難民にならないための「帰宅支援サポーター」

仕事などで出先で災害が発生した際の行動指針を記した携帯カード

災害イメージ本を制作

災害に遭遇すると生活がどのようになるかをイメージさせ、日頃の準備を促し、減災に導く

住民以外にも情報発信

ホームページ上で内外に防災情報を提供。防災に取り組みたい他の自治会らと連携

ハード防災

自宅で緊急情報にアクセス

テレビの空きチャンネルを利用した自主放送で防災・緊急情報やマンション運営情報を放映。自宅やエレベータホールの液晶モニターで視聴できる。マンション内インターネットでの緊急伝達システムも整備。非常通信手段として防災用無線機も管理事務所および各棟担当防災会役員の家庭に設置



地下30mから汲み上げる防災井戸はマンション敷地内の公園に設置され、平常時も自由に利用できる

防災資機材を整備

4ヵ所の倉庫に保管し、防災ベンチにはバールなどを内蔵。倉庫やベンチ、避難集合場所がひと目でわかる表示板を各所に設置

各戸玄関扉に災害時役割ステッカー

全戸の玄関扉に「通報班」「初期消火班」「避難誘導班」のステッカーを貼付。災害時における役割分担を意識づける

断水時に水を確保する防災井戸

手押しポンプに加えて蛇口がハつあり、一つの蛇口から1分間に20リットル給水できる

水洗化もできるマンホールトイレ

下水用マンホールの上に設置して汚物を直接廃棄。防災井戸の水を引き込めば簡易水洗化も可能。組み立て式簡易トイレも配備

災害弱者を運ぶ昇降装置

緊急時に介助者1人でも無理なく避難させるための電動階段昇降機を各種揃える

なぜ参加するようになったのか。
防災会の中心メンバーは、仕事を持つ現役世代だ。忙しい彼らが、

防災会の中心メンバーは、仕事を持つ現役世代だ。忙しい彼らが、なぜ参加するようになったのか。

昇降機や、車いすの人を乗せたまま運べる昇降機などの設備が揃う。昇降機を名前とともに登録。非常に彼らを無理なくサポートするためには、高齢者や障害者が自ら申告する仕組みで、「高齢者で車いすが必要です」「難聴の障害があります」といった情報を登録する。常に彼らを運ぶ高齢者や障害者が、自ら申告する必要があります。「高齢者で車いすが必要です」「難聴の障害があります」といった情報を登録する。常に彼らを運ぶ高齢者や障害者が、自ら申告する必要があります。

特
技登録と併せて「ひと声かけてください」登録も受け付けています。災害時に介助が必要な高齢者や障害者が、自ら申告する仕組みで、「高齢者で車いすが必要です」「難聴の障害があります」といった情報を登録する。常に彼らを運ぶ高齢者や障害者が、自ら申告する必要があります。

「看護師」「医師」「電気・電話・ガス・水道工事等」「老人介護歴8年」「大工仕事」「インターネットでの情報収集・発信」「経理」「中学校教師」などの大勢の前で指導・伝達するのが得意。「炊き出し・買い出し・子守」。

ショットバー」を配信している。

**現役世代参加の力ギは
子どもと酒と気楽な会話**

グリーンパーク上中里では、フロアの外廊下に蛇口が設置され、断水時に1階まで下りなくとも井戸水を給水できる



媒介は子どもだ。子どもたちが参加する夜の防犯防災パトロールやイベントに保護者として親がついてきたときに、徐々に交流を深めて防災会に関心を持つてもらつた。

いる。

「仕事から離れて利害関係のない仲間と気楽に酒を飲む。そんな楽しみが、ここはある」と防災活動に参加するメンバーたちは楽しげだ。

会議の後などには「1000円出しの会」と称し、1000円ずつ出し合って飲み会も催す。気楽な会話のなかで、防災のアイディアを出し合う。電力分野、IT分野など、それぞれが仕事で携わる得意分野から独自のアイディアが提案され、防災活動に生かされて

4500万円を投じた 荒川区の防災マンション

防災井戸は東京都荒川区の11階建てマンション「グリーンパーク上中里」にも昨年、設置された。202世帯680人が住む築26年のマンションに、住民が4500万円を負担して防災設備を整備したのだ。

防災井戸の隣にはLPGガスを満たした巨大なボンベが設置されており。このガスを使った災害時発電システムが非常時には共用の調理場、仮設シャワールームなどに電気を供給する。駐車場には仮設トイレを設置できるようにパイプ

細かいアイディアもちりばめた。敷地内には全世帯分のロッカーを設置し、非常時に必要なものを自由に入れておけるようにした。各階のエレベーターホールにはバルや懐中電灯、台車などの防災資材を配備した。

「災害時に、マンション住人だけでも自分たちの生活をマンションの装備で賄えれば、地域の避難所の負担も減るはず」と山田基夫自治会長。「防災井戸は近所の人広く利用してもらえばと思う」と付け加える。

こうした高層マンションの震災対策への取り組みに、都心の超高層マンションの一部の住人は羨望のまなざしを向ける。

「超高層マンションでは火災訓練はしても震災の訓練はしないところが多い。震災への危機感に乏しい」と東京湾岸の超高層マンションに住む吉武誠さん。

最新の超高層マンションは耐震性に優れており、震災時も屋内避難が基本。コンシェルジュが常駐してホテル暮らしのような生活を享受する一方、住民のコミュニティ意識は希薄だ。「いざというときに助け合えるのか」。心配になつた吉武さんは自治会を結成した。東日本大震災後には加盟店者が急増

を配管した。

細かいアイディアもちりばめた。同じ湾岸沿いにある「芝浦アーランド」は完成入居当初から自治会の組織化を掲げ、加盟率100%。超高層マンションの中でも防災対策が進んでいたとされる。ただ、巨大高層マンションであるため、災害で停電が続ければ、自家発電用の燃料は尽きてしまう。自治会の第1期防災理事事を務めた榎本茂さんは「川沿いにある利点を生かして、非常時に燃料を積んだタンカーから給油できる仕組みをつくりたい」と提案し、奔走している。障壁となる消防法の改正を働きかけているが、防災をどこまで徹底すべきかに住民間の温度差があることが、2枚目の障壁となつていている。

グリーンパーク上中里の場合も当初は反対の声があり、意見をまとめるまでに時間をかけ、実行にこぎ着けた。

「災害時は行政に頼れない」と古川グリーンシティの大西会長。同時に行政の職員も家族も被災するからだ。

「だから自分たちで、自分の大切な人を守る。それがわれわれの防災だ」

やり方はさまざまある。まずは防災の目的意識を地域住民たちで共有することが欠かせない。

している。